

## 西宮歴史調査団ニュース 第7号

西宮市立郷土資料館 兵庫県西宮市川添町15番26号 〒662-0944 電話 0798-33-1298

### 歴史遺産保存活用フォーラムin尼崎 参加報告

栗野光一

#### はじめに

「歴史遺産保存活用フォーラムin尼崎」が、平成29年3月25日に尼崎市立小田公民館において開催された。

これは昨年度開催された「歴史遺産保存活用シンポジウム」に続くもので、主催者の尼崎市教育委員会から参加の要請があった。その趣旨は「地域に残されている歴史遺産の保存・活用やその戦略的な情報発信のあり方を市民とともに考えるため、学識経験者による基調講演と市内の歴史遺産保存活用団体の代表者などによるパネルディスカッションで構成したシンポジウムの成果を踏まえ、引き続き歴史遺産を活かした市民との協働のまちづくりの推進に向けた機運を盛り上げていくべく、近隣都市での歴史遺産の保存活用の取り組みやその成果を学び、市民と共に考えるフォーラムとして開催したい」とのことであった。

また、これは尼崎市とその周辺市で文化財の保存・活用に関わる活動をしている市民グループが集い、活動の報告・現状や課題に付いての情報交換、交流を意図した企画であった。

当日の参加団体は、尼崎市の「富松（とまつ）城跡を活かすまちづくり委員会」、伊丹市の「御願塚（ごがづか）史跡保存会」、豊中市の「とよなか・歴史と文化の会」、西宮市の「西宮歴史調査団」の4団体で、聴衆はおよそ80人だった。西宮歴史調査団からは荒木知・井上太刀夫・倉田克彦の各団員と、栗野光一、郷土資料館の学芸員が参加した（写真1）。



写真1 会場の様子

## 1. 第1部 報告と事例紹介

フォーラムのテーマ「歴史遺産を守り活かす活動に学ぶ」の基調講演として、尼崎市文化財保護審議会委員の大手前大学川口宏海教授より、「歴史遺産の保護・活用に向けた活動について—学会の活動を中心に—」と題して、事例紹介・解説があった(写真2)。



写真2 第1部 基調講演

- 1 歴史遺産と「文化財」
- 2 歴史系学会の活動および社会との関係
- 3 歴史系学会の歴史遺産の保存・活用活動
- 4 歴史遺産の保存・活用活動における歴史系学会の役割
- 5 今後の展望

講演では、歴史遺産と文化財を保存・活用するには歴史系学会の活動が今以上に求められている現状、果たすべき役目や今後の展望について、実例を挙げながら熱く語られた。特に5については、配布資料の中で「かつて多くの学会は、学問的意義・重要性に重きを置き、市民から見た歴史遺産の意義・重要性を重視しなかったが、現在は多様な市民・地域の歴史遺産としての意義・重要性を重視するように方向転換を図りつつある。また、阪神淡路大震災以降、学会も、市民とともに、また公共機関などとともに歴史遺産の保存・活用を図る事の重要性が一層明確になってきた。今後は、このような方向性こそが重要であろう」と結ばれていたのが印象的であった。

第1部後半は前出の4団体から報告者が1名ずつ登壇し、20分ほどの持ち時間でスライドなどを使い活動の報告を行った。

### ・富松城跡を活かすまちづくり委員会

平野部の中世城郭の土塁と堀の特色がよく残っている富松城跡を貴重な歴史文化遺産・尼崎市民の宝と捉え、その保存およびまちづくりに生かす活動をしている。富松城の歴史的役割や先人が残してきた意義を学び、文化遺産富松城跡を次世代に引き継ぐための学習会・講演会なども行い、富松城の保存を図るとともに景観や魅力を活かし、地域住民が誇りを持てるまちづくりのための調査・研究・提言・実践を行うなどをコンセプトとして活動を続けている。

### ・御願塚史跡保存会

御願塚古墳は阪急伊丹線稲野駅西方に在り、古墳時代中期(5世紀後半)の築造で二重周濠を持ち、全長52mの帆立貝式古墳で、稲野古墳群の中で唯一全容をとどめている。

墳頂に南神社が在り、近隣の信仰を集めていたので良好な状態で保存されて来た。また、この古墳の周辺に在った破れ塚（やぶれづか）・掛塚（かかりづか）・温塚（ぬくづか）・満塚（みちづか）の4基と合わせて「五ヶ塚」と呼ばれていたのが「御願塚」になったとの伝承がある。

昭和40年1月 6日 伊丹市「史跡」指定

昭和41年3月 22日 兵庫県「史跡」指定

昭和42年9月 17日 御願塚史跡保存会結成

歴代の会長が連綿と御願塚古墳の保存・活用に情熱を持って取り組んで来た結果、平成29年9月で結成50周年を迎えることができたとの発表があった。

#### ・NPO法人 とよなか・歴史と文化の会

平成17年豊中市主催 原田城跡の未来を考える会（4回開催）の後、平成18年「原田城跡・歴史と文化の会」を発足させ、平成21年には「とよなか・歴史と文化の会」に改称し、国登録有形文化財の旧羽室家住宅・豊中市指定史跡原田城跡の2ヵ所の管理運営業務委託契約を結び、この二つを併せて「原田しろあと館」とし、ここを拠点として活動を始めるようになった。

主な活動は①原田しろあと館の維持・管理、②催し物の企画・実施、③豊中まち案内人、④豊中市との協働事業で能勢街道景観調査である。

#### ・西宮歴史調査団

調査団発足から現在に至るまでの経緯、調査班の活動状況などに付いてスライドを使用して説明を行った。

## 2. 第2部 意見交換

尼崎市教育委員会歴博・文化財担当課長益田日吉氏の司会で、「歴史遺産の保存・活用のこれからを考える」とのテーマで、事例発表を行った4団体の報告者とともに、現状・課題について意見交換が行われた（写真3）。



写真3 第2部 意見交換会

### 3. フォーラムに参加して

西宮歴史調査団を除く3団体は、それぞれが史跡や指定文化財をベースにして、保存・活用運動をされている。

ところが西宮歴史調査団は史跡や指定文化財にはなり得なかった街なかの、一般住民に最も近い場所に在る文化財を対象にして調査を行っているので、前出3団体と同じ土俵で語り合うのには正直ややしんどいという感があつた。

しかし、先人によって築造された物、建立された物、書かれた物、刻まれた物など、遠い昔の息遣いに触れられるということは、史跡や指定文化財でなくても他の団体の皆さんと同じ心でもって、活動が出来ているとの気持ちを改めて感じている。

### 4. 御願塚史跡保存会 結成50周年記念式典

前述した「歴史遺産保存活用フォーラムin尼崎」に参加した4団体の中で、最も長い歴史を有する御願塚史跡保存会は、平成29年9月に結成50周年を迎えた。

それを記念して、9月17日に大手前大学短期大学部いたみ稲野キャンパスにおいて盛大に記念式典が執り行われた。式典会場のホールは100人を超える参加者で満員であった。この式典にも出席（写真4・5）したので、合わせて報告する。

記念式典の第1部では、同保存会会長の挨拶、来賓による祝辞があり、それに続く第2部では、奈良大学文学部文化財学科坂井秀弥教授の記念講演「文化財を活かしたまちづくり」があつた。講演の中で坂井氏がこれまで携わってきた文化財保護活動を含む各地の実例を紹介しながら、とりわけ御願塚史跡保存会が地域住民を中心に地域の組織や団体、小学校など、世代を超えた人々を巻き込みつつ続けて来た活動を高く評価された。また坂井氏は、50年に亘り保存活動が続いていることを「奇跡」だと表現されていた。

一方で、史跡保存会の構成員の高齢化や継承者の育成など、今後の活動継続への視点も提示されていた。

続いて同保存会会長から、保存活動の歩みや現状などについて、スライドを使って報告がなされた。



写真4 保存会会長挨拶  
(御願塚史跡保存会提供)



写真5 満員の会場  
(御願塚史跡保存会提供)



## 5. 記念式典に参加して

一口に50年と言うのは簡単だが、坂井教授の言葉を借りれば正に奇跡と言う他ない。歴代の会長が、保存会のコンセプトをぶれることなく、情熱を持ってリードされてきたからこそその結果だと感じ入っている。

長い歴史の中で、組織が法人のようにきっちりと確立されている事、各セクションが先々を読み取り、企画立案された事案を確実に実行に移されている事、地域の住民を中心にして地域の団体や組織、小学校などを巻き込んでの地道な活動である事などが奇跡を産んだ要因だと思った。

## 6. 尼崎市石造物研究会との交流について

平成25年3月4日に、尼崎市開明公民館において「石造物研究会 小田」のメンバーおよそ10名と交流会を行った（写真6）。

このメンバーは行政とは直接関係はなく、個人の組織として西宮歴史調査団石造物班と同じように寺社や路傍の石造物を調査・記録されている団体である。

交流会の主なテーマは、①伝承を伴う西宮の石造物、②石造物の拓本の取り方で、①は郷土資料館の俵谷和子学芸員、②は栗野光一がそれぞれの解説をした。

平成25年7月29日に現地に赴き拓本を採る計画を立てたが、当日は同研究会代表の都合で計画が中止になり、改めて同年9月6日に小田皇太神社他で拓本採りの実習を行った。

その後、同会のメンバーとは甲山の刻印石見学、門戸地域の西国街道探訪と岡太神社参拝など交流が続いたが、残念なことに現在は交流が途絶えている。何かの機会が在れば再度交流の場を持ちたいと考えている。



写真6 尼崎市小田公民館での交流会の様子

### 【追記】

西宮歴史調査団では、これまで文化財保護に関わる市外の団体との交流の機会が少なく、稀少な機会の両方を偶然にも栗野さんに参加いただいたので、本号でまとめて、ご報告していただいた。

今後も、機会が有れば、他市の文化財保護に関わる団体と交流を広げたいと考えているので、奮ってご参加いただきたい。（記：郷土資料館 西尾嘉美）

# 何故か気になる 鎌田三伯-旧西宮町宗門帳の調査から-

荒木 知 (古文書班)

---

## はじめに

私が所属する古文書班では、西宮市が所蔵する旧西宮町の宗門帳約450冊の調査を進めている。

そのうち、69点が西宮町内浜東町の宗門帳（内1点は宗旨人別関連資料）である。浜東町は、旧西宮町の南東に位置しており、現存する宗門帳の年代は天保2年（1831）から明治2年（1869）までである。

この報告では、天保5年（1834）から慶應3年（1867）までの34年間の禅宗宗門帳10点について、各班員が筆写したノートをもとに比較検討した。その際、どうしても「気になる」人物に関する記述が「気になった」ので、その人物に関する情報を拾い上げてみたのが本報告である。

## 1. 三伯の登場

10冊の宗門帳のうち、天保5年から文久3年（1863）までの8点いずれも、最初のページは「鎌田三伯」である。鎌田三伯は医師で、苗字を許されている。

三伯の名は、この宗門帳以外でも見ることができる。

石造物班の調査で確認した西宮神社の石造物で、「ツインタワー」と呼んでいる巨大な石灯籠に三伯の名を見ることができる。国指定重要文化財の西宮神社表大門（赤門）から入ってすぐのところにある石灯籠は、天保7年（1836）に寄進されたもので、基壇に多数の寄進者の名が刻まれている。その顔ぶれは大半が西宮町の有力者だが、大坂在住の著名人も含まれる。お歴々と呼んで差し支えがないほどのメンバーの中に、三伯も名前を連ねている。

三伯の師匠は西宮出身の蘭方医である原老柳で、三伯は一番弟子にランク付けされている。原老柳は当時、大坂の緒方洪庵と並び称せられる高名な医師であった。ちなみに師弟の年齢差は10歳である。

三伯の名の宗門帳における初見は天保5年（1834）で、三伯と恠3人・娘2人の6人の名が記載されているが、何故か女房の名がない。女房がないのだろうか？しかし、その後2人の恠が生まれているということは、女房がいると思うのだが…。残念ながら、恠二人はいずれも幼くして亡くなっている。

## 2. 三伯の襲名

初見から9年後の天保14年（1843）の宗門帳には「戸主三伯」の名が記されているが、嘉永2年（1849）の宗門帳では「□翁」としていることから、天保14年

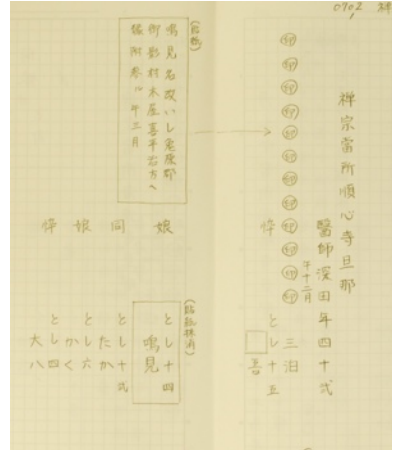
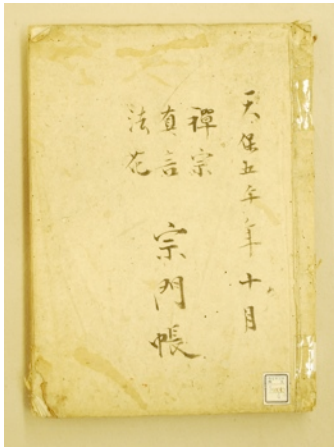
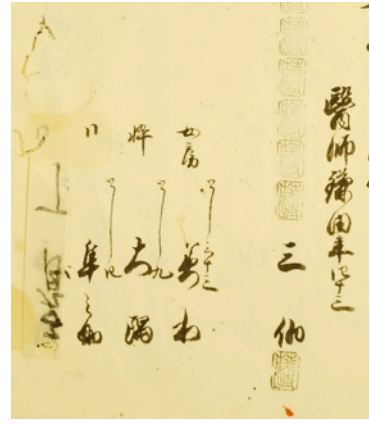
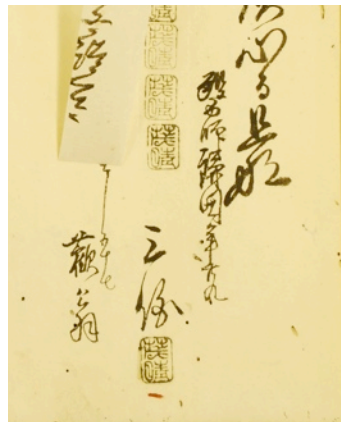
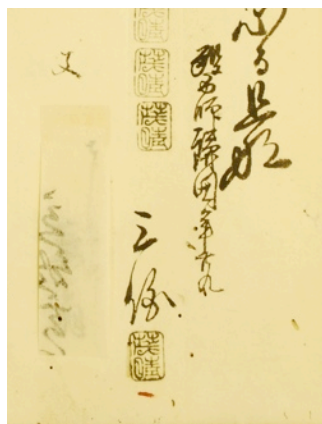


写真7・8・9 鎌田三伯初見である天保5年の宗門帳と調査ノート



二代目三伯が襲名したと見られる嘉永2年の宗門帳  
 左：写真10 「□翁」初代三伯の名が付箋を貼って抹消されている。  
 右：写真11 付箋の下には「相果」と記されている。

写真12 二代目鎌田三伯の一家が記載されている文久元年の宗門帳

元号	年	西暦	干支	宗門帳記載の年齢		出来事
				三伯	□吾	
天保	5	1834	甲午	42	15	宗門帳に初出 三伯：娘(長女)鳴海が嫁に行く
	7	1836	丙申			三伯：西宮神社の石灯笼寄進者に名を連ねる
	10	1839	己亥	47	20	三伯：倅(三男)福吉が夭折
	13	1842	癸酉	50	23	三伯：倅(次男)大八が養子に行く
嘉永	14	1843	癸卯	51	24	三伯：倅(四男)綾吉が夭折
	2	1849	己酉	57	29	三伯：隠居後、□翁と名乗る。この年死去。 □吾：二代目三伯襲名 原老柳門下の名簿に「西宮鎌田三伯」「西宮鎌田貫吾」の名が見える
	5	1852	壬子			□吾：原老柳に古希の祝いを贈る
文久	1	1861	辛酉		41	□吾：倅(長男)信吉が大隅と改名 □吾：娘(長女)いそが夭折
	3	1863	癸亥		43	□吾：倅(三男)三郎が夭折
明治	20	1887	丁亥			「大阪府平民 出版兼編輯人 鎌田三伯」の名が刊行物に見える

表1 鎌田三伯父子 年表

から嘉永2年の間に三伯は隠居し、悴□吾に三伯を譲り、自らは□翁と称している。なお、□で表記をしているのは、文字の判読が難しいためである。悴の名も判読が難しく、□吾と表記せざるを得ない。

ちなみに、悴を「豊吾」と読めたのは8冊中2冊である。

一方、「貫吾」と読める記述もある。

彼は父三伯と同じく原老柳に師事したが、原門下の名簿である嘉永2年(1849)に作られた「原老柳門譜」(西宮市立図書館蔵)には「西宮鎌田貫吾」と記述されている。嘉永5年に行われた原老柳の古希祝名簿にも「鎌田貫吾」が記載されている。仮に宗門帳にある「豊吾」が「貫吾」と同一人物の2代目三伯であれば、双方に記載された年齢が1歳ずれている。記述した時期によるのか、別人なのか、謎が広がってしまった。

### 3. 三伯のその後

鎌田家は、慶応3年(1867)以降の宗門帳に記載がない。断絶したのか、転宅したのか、廃業したのか?と案じていたら、池田文庫(池田市)所蔵の古書籍から、鎌田家の動向がわかった。明治20年(1887)に出版された刊本に、大阪市南区西櫓町の住所、鎌田新仙堂という出版社名、その出版兼編集人として鎌田三伯の名が登場する。宗門帳の記述と合わせてみると数え年67歳なので、二代目三伯、つまり悴□吾のことと考えられる。少し安心した。

### 4. 余録

気になってしかたなかった三伯父子以外に、鎌田家の名を見つけた。

一つめは、西宮神社所蔵の県指定文化財「西宮神社御社用日記」の元禄14年(1701)3月11日の項に、医師鎌田三仙が仲間を連れ、拝殿でドンチャン騒ぎをして大問題になった記録がある<sup>註1</sup>。

宗門帳より130年ほど遡るが、同姓の別の家?ご先祖様?ご先祖様なら何代前かは分からないが、あまり芳しくない記録である。

二つめは、俳諧師二蕉庵紫香こと鎌田三伯の句碑が雪舟ゆかりの常栄寺(山口市)にあった。彼は、天保10年(1839)頃に幕臣として江戸に生まれた漢方医らしく、大正8年1月11日に山口市で80歳で死亡したようであるが、詳細な履歴は不明となっている。同じ名前で、同じ職業…ややこしい限りである。

註1 西宮神社文化研究所編『西宮神社御社用日記』第一巻 271頁～218頁 平成23年9月刊行

---

西宮歴史調査団は、団員に登録した市民が主体となって、西宮市内の文化財を調査し、記録を作成する文化財調査ボランティア活動の団体です。西宮市立郷土資料館が主催しています。

西宮歴史調査団ニュース 第7号 平成30年(2018)3月10日